

# 新制作

SHINSEISAKU



Vol.75 / 2018

夏号

新制作協会 広報誌

# 82nd



## 第82回新制作展開催のご挨拶

公募団体展への出品の動機は様々であろう。公募展の功罪も色々あって、個人の思惑と集団の多数決原理と折り合う訳もなく、出品者はそれぞれ何かしら、あつれきや悲哀を味わうものようだ。私にとっての新制作はいろいろな人の出会いと、絵に対するロマンの追求ということでも大事な場だったように思う。

昨年より良かったとか、マンネリだとかそんな制作態度がひと目で分かり、今更ながら、他人は自分の鏡であり、見ることに作ることの難しさを知るばかりだ。離れ小

島で一人でアートは成り立たない。見てもらう人がいなくてはダメなものだ。そんなことを考えながら毎日が制作で日々が格闘と思っている。

新制作には優れた先輩たちの遺産がある。それは我々の心に残る先人たちの生き様や作品や言葉などだ。新制作展出品の動機の一つのあこがれが一番大きいのかも知れない。それらの遺産を胸に自分だけの道を見つけ、精進し、少しでも前に進めたらと思う。

いつも思うことだが、新しい年度になるた



委員長  
さとう たいせい  
佐藤 泰生

びに、新制作の大事な志に戻り、改めて自分たちの足元を見つめ直して制作に励みたいと思っている。

### 第82回 新制作展

9.19 (水) — 10.1 (月)

10:00 ~ 18:00 (入場 17:30 まで)

[開催時間等は変更の場合あり。開催状況の確認は、国立新美術館HP・ハローダイヤル(03-5777-8600)で]

### 国立新美術館

入場料 一般：800円 (学生・65歳以上無料)

休館日 9/25 (火)

金曜日 20:00 終了 (入場 19:30 まで)

最終日 10/1 (月) 14:00 終了 (入場 13:00 まで)

新制作展に初めて応募される方、すでに作品応募の準備をしていらっしゃる方へ…

新鮮な力作をお待ちしています。  
応募情報は、美術関係誌広告、協会発行の公募ポスター・リーフレット・応募規定、公式ホームページをご覧ください。

新制作協会賞および新作家賞受賞者には、賞牌としてスペースデザイン部会員・藤原 郁三 氏の作品が授与されます。

応募のお申込みとお問い合わせは

- Tel 03-6233-7008
- Fax 03-6233-7009
- E-mail [webmaster@shinseisaku.net](mailto:webmaster@shinseisaku.net)
- 公式HP <http://www.shinseisaku.net/>

事務局オープン日

月・火・木・金：10時～17時

新制作協会 〒160-0022

東京都新宿区新宿6丁目28番10号  
大阪屋ビル202号

### 2018年度協会新代表委員

[代表委員会]

委員長 佐藤 泰生 (絵画部)

副委員長 瀬辺 佳子 (彫刻部)

〃 藤原 郁三 (SD部)

代表委員

● 絵画部

菅沼 光児、杉野 和子、竹内 一、平田 智香

● 彫刻部

新美 正樹、菱田 波、人見 崇子、渡辺 尋志

● SD部

雨山 智子、伊藤 順、片岡 葉子、二井 進

[合同委員会]

● 会計委員会 ● 図録委員会 (図録 / 広告)

● 美術館担当委員会

● 広報委員会 (広報・PR / 会報 / HP)

● IT委員会 ● 受賞作家展委員会

● 慶弔委員会 ● 美術団体懇話会



代表委員



カット・大野良一



第82回展ポスター

## 各部より

### 絵画部

竹内 一

#### 変わります！絵画部

絵画部では、今年度から企画行事を徐々に変革し、従来の会員からの講評会形式であったギャラリートークから、会員・一般を問わずにアーティストとして語り、学び、作家としての意識を高めていくような企画行事へと移行していくことを考えています。

その元年として、初日はオープントークに加え、新会員の紹介も兼ねた新会員と会員によるトークを実施し、新会員の方々の此処に至る過程や意識や表現の変遷などを皆様と共有していけるようなトークを設置します。

そして、例年のギャラリートークに加え、連休を利用した新たな行事を設定します。第一にはアートレクチャー。これはその名の通り、様々な角度からアートを吸収しようとするもので、講演会や一つのテーマを設けての討論会、新制作の先人達から学ぶトークなどを順次考えていく予定です。

今年度は初年度として講演会を実施いたします。講師として現代美術を中心に研究されている上智大学教授の林道郎氏をお招きし、その視点から講演をして頂きます。

そして第二にアーティストトーク。これは制作における種々の視点からテーマを絞り込み、会場を回って数点の作品を見ながら、会員数名を中心として皆様と語り合います。今年のテーマは抽象・半抽象・具象の各表現についてです。

このように企画行事を変革することによって会員のみならず、一般出品者の方々も含めた、全参加型の一つの新作協会絵画部を目指していきたいと考えていますので、積極的なご参加をお待ち申し上げます。

その他として、昨年と同様に被災博物館復興支援を目的とした会員作品のチャリティー、缶バッジやポストカードの販売を予定しています。こちらも皆様方の積極的なご参加をお願いいたします。

### 彫刻部

渡辺 尋志

昨年からのサイズ規定の撤廃は作品の今後の可能性を広げたとのたくさんの反響がありました。特に一般出品においてはサイズの制限が表現の幅を狭めていましたが、この変革にご賛同頂き思い切りのよい作品を搬入してくださいました。展示会場もいつもとは様子が違う空間に感じられたというご意見も頂きました。今後もこの取り組みを続けていくこととなります。

現在、日本の公募美術団体は出品者の減少で大変厳しい状況になってきています。新制作展も例外ではありません。

反面、美術鑑賞に時間を費やす人々が増えていることも感じられます。また、海外からのお客様を見かけることも多くなっています。こんな中、どのような行動を起こし、上昇する風をどのようにつかまえていくのが今後の課題となるでしょう。

新制作展は発足当時から厳選なる審査を重ね、新しい展示空間を作り出してきました。90歳を超える会員と20歳そこそこの若い出品者を隣同士に展示し素材の違う作品が並び抽象的形体と具象的形体を隣同士に配し、分け隔てなく作品を平等に扱うことで鑑賞者が楽しんで歩ける会場になると思います。

82回展は昨年にも増して迫力ある作品が出てくると思います。また、オープニングトークなどの企画では参加された皆様に作品創りの楽しさや苦悩、そして新制作展の魅力が伝わると 생각합니다。

#### ●オープニングトーク / 彫刻展示会場

9月19日(水) 15:00～16:30

#### ●ギャラリートーク / 彫刻展示会場

9月23日(日) 14:00～

●チャリティー作品販売 / 彫刻展示会場  
会員の小作品、デッサンなどを格安にて展示販売します。

#### ●ポストカード販売 / 彫刻展示会場

展示作品のポストカードを販売します。

#### ●QRコード、小冊子

会員、受賞者のコメントが読めるQRコードを題名カードにつける予定です。

また、入口受付ではこれをまとめた小冊子を希望する方にお配りする予定です。

### スペースデザイン部

片岡 葉子

創立会員の「建築もデザインもまたアートである」との思いによって1949年に創設された建築部は、その後時を経てスペースデザイン部となり今日に至っています。当初は建築、家具デザインが中心でしたが、今は木工、陶芸、照明、テキスタイルなど、幅広い分野、素材の作品が集まっています。アートが多様化し又それぞれの表現の垣根が低くなってきている今、スペースデザイン部のグローバルで包容力のあるあり方は大きな可能性を持つのではないかと考えられます。作品公募には床面展示、壁面展示、宙吊り、野外展示の一般審査部門とミニアチュール審査部門があります。毎年出品作品総数は増加していますが出品しやすいミニ作品が増える傾向にあり、想いと力と時間の結集である一般作品の増加が課題です。

ここ10年余り、会員による作品制作に関するレクチャー、ワークショップなどと会場でのフリートークを行ってきましたが、今年は少し趣向を変えて出品者に作品を語っていただく機会を中心に企画を考えたいと思っています。

#### ●ギャラリートーク / スペースデザイン展示会場

9/23(日) 14:00～(予定)

#### ●チャリティーグッズ販売 / スペースデザイン展示会場入口 / 会期中

アクリルのスペースキューブ(h: 8 w: 10 d: 10cm)の中身を会員それぞれが製作し¥3000で販売し、売り上げを博物館協会に寄付します。作品あり、作品の部分あり、使える物ありで好評をいただいています。

#### ●ポストカード販売 / スペースデザイン展示会場入口 / 会期中

会員作品、受賞者作品のポストカードを販売しています。

# 受賞作家展 - 新制作協会賞および新作家賞の副賞として企画される受賞者の新作展覧会です -

絵画

INOAC 銀座並木通りギャラリー

1/25 THU - 2/2 FRI

新会員

■ 柿原 康伸      ■ 近藤 オリガ

新作家賞 受賞者

■ 奥田 善章      ■ MARTIN FAUSEL  
 ■ 小山 剛      ■ 吉成 文男  
 ■ 仲田 道子      ■ 和田 和子  
 ■ 蛭田 美保子



近藤 オリガ 新会員  
無題 100F



柿原 康伸 新会員  
明け行く大王崎・波切の漁村 M100



小山 剛  
時を紡ぐ街 100F



奥田 善章  
森の中で夢を見る(1) 100F



MARTIN FAUSEL  
月下の二人 53×84cm



吉成 文男  
パラダイス16 72.8×103cm



仲田 道子  
メタファ 100F



蛭田 美保子  
暗示 100F



和田 和子  
道1 100F

彫刻

ギャラリーせいほう

2/5 MON - 2/16 FRI

新作家賞 受賞者

- 浮田 麻木      ■ 小嶋 満明
- 小口 偉        ■ 田中 和之
- 香取 宏幸     ■ 仲田 耕治

81 ⇨ 82 回新制作展彫刻部シード作家：  
小口偉、小嶋満明、仲田耕治



香取 宏幸 / 雲を待つ 樟



小口 偉 / 漕 樟



仲田 耕治 / 零 梅



浮田 麻木 / 風の軌 木



小嶋 満明 / 螺旋の詩 I FRP



田中 和之 / 雲と風の声 御影石

SD

建築会館ギャラリー

2/4 SUN - 2/9 FRI

新作家賞 受賞者

- 神 芳子        ■ 西野 芙佐子
- 関家 美紘



関家 美紘  
群生 I 150×90×300cm



神 芳子  
編まれた空気物 170×110×30cm



西野 芙佐子 / 風光る  
72×300×10cm

## 表現についての二つのアプローチ

絵画部会員 福田 徳樹

スタンダール（1783～1842）『イタリア日記（1811）』（白田紘訳、新評論社、2016年）という本が市の図書館にあった。彼はナポレオン軍のモスクワ退却の1812年、下級兵卒ながらそこに勤めていたはずだから、前年、どうしていたのか興味があった。モスクワに居なかったのではない。食糧補給役のような兵として働いていたらしい。しかし、陥落の時はフランスに帰っていて、再び好きなイタリアの文物を訪ねる旅に出始めている。この本でおどろくのは高貴なイタリア婦人をして追いかけて、その間の記述は書中全体に及んで、まるでポルノ小説のすさまじさ。

しかし9月24日、ボローニャの記中の一部を引く。「巨匠の絵画に大讃辞を贈るのを聞くと、私はいつも次のように考える。それを街角に見つけたとしたら、私はそれに注意するだろうか。私は表現力、想像力、自然さでしか評価しない。」表現と想像の力は当然必要だ。しかし、自然さ、とは。ここで自然さと言って、大きく、含蓄のある表現を考えている。今までになかった新しい表現を希求するところから出た言葉のように感じられる。万感の想い、余韻のようなものが感じられるのではないだろうか。



イッシィの庭 アンリ・マティス 1869～1954年  
キャンヴァス、油彩 1917年頃 130×89cm

しかし『赤と黒』（1830）は、ジゴロを演じて他にいなかったジェラルド・フィリップの映画で戦後の学生の時見ただけ。『パルムの僧院』（1839）は読み切れず。手もとの小帖に人物をエンピツスケッチで描き起こして楽しんで過ぎなかった。どこか童話のような趣があるように感じられた。

もう20年以上前になるが、オーヴェルニュ地方のロマネスク寺院を訪ね、終わりにパスカル（1623～62）の生誕地とされるクレルモン・フェランのカテドラル後部の壁のすぐ下の町外れに行った。8才までいたにすぎなかったという。早くからキリスト教に自然に対峙していたのかもしれないと感じた。

ところで、パスカルの専門家前田陽一の著『パスカル 考える葦の意味するもの』（中公新書1968）は難しいところもあるが、生涯をかけた研究者のテキスト解読の意欲に圧倒される。有名なところだ。『われわれはそこから立ち上がらなければならないのであって、われわれが満たすことのできない空間や時間からではない。だからよく考えることを努めよう。ここに道徳の原理がある。』

スタンダールの、自然さというところには言い難い柔軟さがある。しかし、160年前という年月の差を超えてパスカルが考えているところとは変わりがないようだ。新しさの創造のためには、アートとは逆のようだが、道徳とか、倫理といった精神活動も必要なのではないだろうか。



預言者エレミア  
モワサック サン・ピエール修道院聖堂  
南扉口中央柱 1151～30年頃  
中央柱の高 約6.5m

さらに『パンセ』の後の方に、パスカルの貴重な省察があったので敷衍し、この文を終わる。

「考えが不十分であると、あまり考えすぎると、かたくなになり、それに心酔してしまう。」

「作品を、つくりあげてすぐに考察すると、まだまだその作品に対しあらかじめ好意をよせてかかる。あまりあとになりすぎると、もうその作品の中へ立ち入れない。」（『パンセ』上巻 津田穰訳）（新潮文庫1952）



オータンにて 2008.4

## 新制作との出会い

絵画部会員 近藤 オリガ

私は当時ソ連邦内の一共和国であったベラルーシに生まれ美術教育を受けました。1980年代にゴルバチョフがソ連の指導者になり東西関係は急速に変化の兆しが表れ始めました。然し私達は隣国のチェルノブイリ原発事故の際には未だBBC放送で事態の進展に耳をそばだてていました。その頃主人（日本人）は東ベルリンにいて1989年のベルリンの壁の崩壊、1990年の東西ドイツ統一など激動のドイツを身近にみていました。第2次世界大戦終結までドイツにいて終戦後荒廃したベラルーシに戻った私の母は、鉄のカーテンで西側とは長く隔絶されていましたがソ連が崩壊、西側への旅行も可能になり、孫（私の姪）のヨーロッパ演奏旅行が縁で四十年振りにドイツの知人家族の消息が分かり劇的な再会、それが縁となり私の創作活動も社会主義圏内から西ヨーロッパ（特にドイツ）に広がり、またその後主人との運命の出会いもあり日本で活動することになりました。

日本に来たのは2007年末、在住10年あまりになります。日本の伝統美術等は写真集等で見ていましたが美術界については勿論無知でしたので、創作活動を始めた翌年春頃から作品発表の方法・機会等について作品を持参して画廊関係、美術館の学芸員の方々に相談に伺いました。然し、日本での画歴がない私は入口の段階で全く相手にしてもらえず、先ず公募展等で入賞・入選の実績を出してから出直してくるよとの助言でした。

公募展を探すと数えきれない程の全国規模の公募展が年間を通じて開催されていることを知り、まさに日本は美術大国だと大変驚かされました。幾つかの美術団体から応募要項等を集めましたが無処にしてよいか判断する術もなく途方に迷っていました。偶々ある画材店に額縁の注文に行った際その社長にお会いする機会があり、日を改めて作品を持参したところ私の作品を評価して下さり、公募展への応募を薦めてくれました。薦められた公募展は3つ。6月頃のこと、推薦

の3つのうちでタイミングが一番よいのが8月末締め切りの「新制作展」でしたのでここに応募することに決め、初めての里帰りで一か月母国に滞在中長女をモデルにしたエスキースを準備し、日本に戻ってから締め切り直前によく完成させたのがF100号の「朝の祈り」でした。

9月になり偶々出かけた名古屋の「熱田神宮」から帰宅したところ協会からの郵便が届いており緊張して開封すると審査結果通知で思いもかけず入選。自分の作品が初めて日本で評価されたと感激しました。創生期の新制作のことを知る主人の年老いた母、また画材店の社長も大変喜んでくれました。この社長との出会いが無ければ新制作との縁も恐ろしくなかったかも知れません。4年前に亡くなるまで入賞・入選等を報告すると何時も大変喜んで下さり、また励ましてくれました。今でも社長には感謝の気持ちで一杯です。

展覧会開催に合わせ主人と「おのぼりさん」よろしく東京見物も兼ねて上京、国立新美術館の会場に足を運びました。初めて見る六本木界限、また国立新美術館の建築物も印象的でしたが、複数の美術団体が並行して公募展を開催し大勢の観客が其々お目当ての展覧会に吸い込まれていく光景にも驚きました。新制作展の展示場に入り素晴らしい大作が展示されている中で見つけたタダ1点のF100号（記憶が正しければ）、それが私の作品でした。まるで霞んで見え存在感もなくこのような会場での展示に値するのかと自問する程でした。主人も私も相当なショックを受け、偶々少し離れたところにいた会員と思われる年配の男性に主人が話しかけ助言を求めました。私の作品の前に移動しこの方の批評・助言を伺っていると、Tシャツ姿の年配の男性が現れお二人の美術談義が始まりました。最初に話しかけた方が松浦安弘先生、そのあとジョインされた方が今は亡き渡辺恂三先生だった、ということは翌年の新制作展で初めて知りました。お二人は初入選の見知らぬ私に貴重な助言と共に叱咤



カット・松浦安弘

激励をして下さり、新制作展に出し続ける勇気を与えてくれました。その時の助言はその後の作品にも反映されています。

以来毎年応募を続けていましたが、審査結果通知の郵便を受け取り「今年はダメかも」と思いながら開封する際の緊張感が変わることはありませんでした。またそのような緊張感を持ち続けたいとさえ思っています。その後私は新制作の創立について、またその規約について読みました。芸術の世界で権威主義が蔓延するとどうなるかは昨今日のあたりになってきました。縁があって新制作展への出品を続けてきましたが、自由闊達、反権威主義の雰囲気は僅かな経験でも感じており、時代に迎合しない創作活動をモットーにしている私にとっては正しい選択をしたのではと思っています。



故・渡辺恂三先生・松浦安弘先生と 2008年9月

## 《物故会員 展覧会情報》

◆ 3月24日～5月27日の期間、兵庫県立美術館にて故・小磯良平氏と故・吉原治良氏の展覧会「小磯良平と吉原治良展」が開催されました。



小磯良平《踊りの前》1934年  
油彩・布 京都市美術館蔵

◆ 3月20日～4月18日の期間、Bunkamura ザ・ミュージアムにて故・猪熊弦一郎氏の展覧会「猪熊弦一郎展 猫たち」が開催されました。

## 《荒井茂雄氏 展覧会のお知らせ》

◆ 4月14日～7月1日の期間、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館にて絵画部会員・荒井茂雄氏の展覧会「荒井茂雄展 人生の詩」が開催されます。



荒井茂雄《宇宙のリズムB》2011年  
丸山晚霞記念館蔵

## 《地方展日程》

### ● 新制作展（神戸）

兵庫県立美術館王子分館 原田の森ギャラリー  
10/31(水)～11/7(水) ※休館日 11/5(月)

## 《地方グループ展のお知らせ》

◆ 4月17日～4月22日の期間、広島県立美術館県民ギャラリーにて「第58回新制作広島グループ展」が開催されました。

◆ 5月3日～5月11日の期間、兵庫県立美術館王子分館 原田の森ギャラリーにて「第71回関西新制作展」が開催されました。

◆ 7月17日～7月22日の期間、横浜市民ギャラリーあざみ野にて「神奈川新制作展」が開催されます。

## 《新制作 — 表紙の言葉》

この作品は昨年(2018年)の第81回新制作展に出品した「石の家達とふくろうく女のいる風景」です。くしくも八十八才米壽の年です。

幼い頃から脆弱であった私が、戦中戦後の体験をへて、この年齢で絵を描きつづけていることに自分でびっくりです。

新制作展にあこがれ、二十八才から出品以降、受賞、会員と新制作の風土に育てられてきた六十年だと思っています。まさに感謝の日々の画家としての暮らしが続いているわけです。

画風は非形象から少しずつ変化しながら、第35回展から「女のいる風景」という副題をつけることで、女をテーマに画面をつくりはじめ、この様式を追求することで四十五年描きつづけ、新制作展に出品しつづけました。

絵をかくということは、どんな時代、どんな年齢の中でも、自分の想いをすなおに表現できるかということで、その表現の軸となるのはいつもいる女といろんな物達のコラージュであり、それらが構成される広がり、色・形のつながりから生まれる変化の面白さを長い時をかけて育んできたと思っています。

最近、高齢化する身と心が新しい自分に出会います。いままで考えてもいなかった自分、いままで思ってもいなかった自分、それらが絵画として表現されたとき、より新鮮な生きざまにつながってゆければ、喜ばしいことだと思っています。

(絵画部会員・石阪春生)

## 《伝言板》

◆ 図録のバックナンバーについて  
絵画部物故会員・飯田四郎氏のご遺族の飯田奈津子様より、過去の図録をご寄贈いただきました。大切に保存させていただきます。

引き続き寄贈可能な号がありましたら、皆様ぜひご協力をお願いいたします。

### ◆ 事務局からのお知らせ

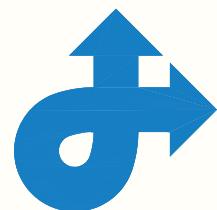
2月に退職しました吉田知世に代わり、新事務局員は桑久保紀代子になりました。尚、事務局オープン曜日は、月・火・木・金の10時～17時に変更になりました。

## 編集後記

昨年初めて広報誌の編集を担当し、会員と出品者と鑑賞者の方々との間をつなぐ重要性を痛感しています。会員の声を反映させ、地道に変化を重ねながら情報提供をしてきた広報誌が、これからも新たな方向を探って「新制作」らしさを維持していくためには、若い人たちとの真剣な競い合いが必要だと感じています。若い世代の声を中心に、新機軸を打ち出せるか楽しみです。

今号に原稿をお寄せ下さった方、ご協力頂いた皆様に深く感謝申し上げます。

(本田)



## 新制作協会

〒160-0022

東京都新宿区新宿 6-28-10 大阪屋ビル202

Tel: 03-6233-7008 Fax: 03-6233-7009

URL: <http://www.shinseisaku.net/>

E-mail: [webmaster@shinseisaku.net](mailto:webmaster@shinseisaku.net)

発行 / 新制作協会

企画・編集・制作 / 広報委員会 広報誌編集委員

小島 隆三、山口 都、岩間 弘、

本田 悦久、中野 威

監修 / 佐藤 泰生

発行日 / 2018年5月

表紙絵 / 石阪 春生 「石の家達とふくろうく女のいる風景」

2017年、第81回新制作展出品作品

\* 広報委員会では、新制作展に関わるニュース、伝言、ご批判、ご意見をお待ちしております。お気軽にお寄せください。次号をご希望の方は協会事務局迄ご連絡ください。

## 訃報 (平成30年3月末現在)

新制作協会発展に尽力されました故人を偲び、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

### 中島 幹夫 氏

彫刻部会員

平成29年12月20日逝去  
(享年84才)

